
2021 年度ベストサービスラーナーによる報告

サービスラーニングセンターでは、毎年ベストサービスラーナー選考会を開催しています。この選考会は、該当年度の卒業予定者を対象に、これまでサービスラーニング科目を履修した学生の中から最優秀者を選出するものです。学長あるいは副学長、各学群の代表教員、関連部署の職員を審査員に迎え、選考会当日に参観した学生も投票に参加し、最優秀者を選出します。

この選考会は 2016 年度に始まり、今年度で 6 回目を迎えました。新型コロナウイルスの影響で、昨年度同様、今年度もオンラインでの実施となりました。以下には、第 6 回ベストサービスラーナー選考会の審査委員長である堀副学長の講評および最優秀賞、優秀賞を受賞した 6 名の学生たちによる発表内容を掲載します。

審査委員長講評

副学長 堀 潔

このたびは、ベストサービスラーナー選考会へ出席させていただきましたこと、そして学生諸君の素晴らしい報告を聴くことができましたことに、改めて感謝申し上げます。

私は、学生諸君が在学中に「よりよい学び」を得るために、以下の3つのことをやってほしい、と機会あるごとに学生諸君にお願いしています(あまりやってくれる人がいなくて、残念なのですが……)。

① いままで知らなかったことを、知る。

世の中には、まだ諸君の知らない、習ったことのないことがたくさんあります。わからないことや理解できないことがあっても、新たな知識や経験を得られることを素直に喜びましょう。

② いままで考えてもみななかったことを、考える。

世の中には「答えが一つではない」問題が多々あります。多様な視点から物事を考え、違う視点に立つ人々の意見を理解する寛容さを養いましょう。

③ いままでやったことのなかったことを、やる。

失敗するかもしれないので、未経験のことには二の足を踏みがちですが、なぜだかわからないけれども「やってみたら、できた」という経験をすると、自分の新たな可能性に気づくことができます。

本来、「教育」とは、いろいろな手法を用いて学習者に上記3つの「壁」を突破させ、人々によりよく生きる方法や知恵を授けるものだとは私は思っているのですが、本学の「サービスラーニング」は、この3つの「壁」を突破するのにとてもよい教育のあり方だと感じています。とくに、私たちの身近なところにある多様な「現実」に教育の題材を求めている点や、「学んだことを人のために役立てる」ことができるかどうかを社会のなかで確認できる点などが、本学の教育のモットーである「学而事人」を体現していて、素晴らしいと私は感じています。指導にあたられている先生方やスタッフの皆さまのご努力や、学生に対するご配慮にも敬意を表します。

さて、サービスラーニングのような体験型の授業では、教室で講義形式の授業を受けているのとはまったく違った知識や情報が得られます。教科書に書いてあることや先生が解説して下さることのように最初から理解しやすいように整理されていないので、最初は何のことだかよくわからなくて苦労することもあるでしょう。授業で習ったことと実際に研修先で見聞したこととの間にギャップを感じ、いままで学校で勉強したことは何だったのか、と混乱することもあるかもしれません。実際の研修では慣れないことも多くて、最初はなかなかうまくいかないこともあるけれども、研修先の担当者の助言を得ながら繰り返し試してみたり少し工夫してみたりすることで、次第にうまくやれるようになっていき、「勉強になった」「自信がついた」と一定の達成感が得られるようになってきます。

多くの学生諸君の報告でも、こうした自身の成功体験が多く語られます。これだけでもサービスラーニングにとりくんだ甲斐がある、というものですが、そこがサービスラーニングの到達目標ではない、と私は考えます。授業で聴いて理解していたことと実際にあなたが研修先で目にしたものが違っていたとして、それは授業で教えてくださった先生の言っていることが間違いなのでしょうか。あなたの成功体験は、あなたが優れていたからこそ得られたものでしょうか。あるいは誰でも成功に至ることのできる「何か」を知ったからでしょうか。こうした、物事を一般化したり相対化したりして考えてみることで、あなたの学びはさらに深まっていくことになるのです。選考会での審査委員の先生方からの質問やコメントの多くは、個々の発表者がどれほど深い学びを得たか、を確認するためのものであった、と私は理解しています。

サービスラーニングを一つのきっかけとして、多くの学生諸君が深い学びのなかで自らを成長させることができるよう、今後とも多くの学生諸君がサービスラーニングに取り組んでくれることを心から願って、私からの講評に代えさせていただきます。

最優秀賞

学びからさらなる発展へ

リベラルアーツ学群4年 神崎 真珠花

【履修したサービスラーニング科目】

2019「国際協力フィールドワーク(インド)」

2020「専攻演習Ⅰ」「専攻演習Ⅱ」(国際協力専攻/担当教員:牧田東一)

2021「地域社会参加(環境政策 B)」「地域社会参加(災害支援とボランティア)」

1. はじめに

私の専攻は、国際協力・国際関係のダブル専攻です。私は「女らしさ」を求められることに疑問を持ち、国際問題の中でも特にジェンダー問題に関心を持つようになりました。ボランティア活動が出来ることや、国際協力に関連する英語文献を読めることが魅力的だったことから、3年生から入れるゼミでは、国際協力専攻の先生である、牧田先生のゼミを履修しました。ボランティア活動により、自分が出来ることは何か、求められていることは何かを考えたいと感じていたことや学生時代から社会貢献をしたかったので、ボランティア活動がある牧田先生のゼミは魅力的でした。また、日常生活で英語文献を読む機会がなかったので、ゼミを通して英語文献を読み、さらに、国際協力の専門用語を学べることも魅力の一つでした。

2. インドフィールドワークでの活動

2020年2月にインドの南部に位置するバンガロールで2週間、フィールドワークを行いました。参加した理由は、国際問題を取り扱っている授業でインドの子どもの問題が印象的だったのがきっかけです。ストリートチルドレンや児童労働の子は、今でも存在しているのかという疑問や、この子どもの問題は女性が関わっているのではないかと、女性問題が解決したら改善されていく問題なのではないかと感じ、この現状を現地を見て、自分で考えたいと思いました。

前半の1週間では都市部に行き、環境、女性、子どもなどを対象に活動をしている様々な NGO への訪問や、スラム街への訪問、現地の大学生との交流をしました。後半の1週間では農村部に行き、学校の建築作業、学校に通う子どもたちとの遊び、農村調査、民族衣装であるサリー体験、ホームステイなどを行い、学びを深めていきました。フィールドワークを通して、根深いジェンダー問題が印象に残りました。例えば、女性しかキッチンに入れないという性別役割分業があること、女性や子どもが道で物を売っていることが多いこと、女性の人権を扱っている NGO へ、家庭内暴力の相談が毎日数件あること、女性軽視の考えから女兒殺し問題があり、女兒より男児の人口割合が多くなっていることなどが挙げられます。弱者とされる女性や子どもが不自由な生活を送っているのではないかと感じました。



学校の建築作業のお手伝い



スラム街

3. 専攻演習Ⅰ・Ⅱ

2020年春学期から2021年秋学期に履修しました。2020年秋学期期間には、図師小学校でボランティ

ア活動として1年生のクラスの見守りをしました。そこでは、ランドセルが多種多様になり、「赤＝女の子」、「青＝男の子」という概念が少しずつ減ってきているのではないかと感じました。また、約 20 分の昼休みでは、男の子、女の子共に大縄飛びをしている姿がしばしば見られました。それは、女の子は室内で遊ぶというような概念ではなく、好きな場所で誰でも遊べる環境になっているから見られた光景なのではないかと考えました。しかし一方で、「女の子なのに」、「男の子なのに」と性別役割的発言を子どもたちの会話で多く使われていたことも印象的でした。私たち大人が、気付かないうちに性別役割的発言を子どもたちにしてしまっていると痛感しました。

2021 年の春学期、秋学期の一年間を通して卒業論文を作成しました。インドフィールドワークと日本でのボランティア経験を通して、インドにおける根深いジェンダー問題により関心を持ったことから、インドの女性問題について、特に、根深く残っているダウリー(結婚時に新婦が新郎に与える婚資)について論述しました。卒業論文は、第1章から第3章まで5万字にまとめました。第1章では、ダウリーの歴史やダウリーを中心に、その他の女性問題や社会問題との関係性について、第2章では、ダウリー継続の原因を歴史、法、伝統的価値観から把握しました。最後の第3章では、政府や州、国際機関、NGO はどのように捉え、取り組んでいるのかについて論述しました。結論として、ダウリー禁止法の強化が必要であり、そのためには法執行機関がダウリーの悪影響について認識すること、法執行機関と国際機関・NGO が協力すべきであるという結論を述べています。卒業論文を通して、ダウリーは、家父長制、子ども婚、女兒殺し、家庭内暴力など、インドにおけるジェンダー問題に深く関わっていると感じました。従って、ジェンダー問題解決の一つにダウリーの解決があるのではないかと結論を私自身は考えました。また、ジェンダー問題の解決は、インド社会におけるその他の社会課題(貧困や差別)解決の促進や人間の安全保障の向上も期待でき、弱者の恐怖からの自由やエンパワーメントも促進できるのではないかと、インド社会全体がより良い社会になるきっかけになると考えました。

4. 卒業後の進路

インドフィールドワークと卒業論文の作成によって、インドのジェンダー問題の深刻さを痛感し、黙認すべきではないと強く感じました。従って、大学院で根本的解決策を導き出したいと感じ、卒業後、立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻に入学予定です。研究を通して、インドにおけるダウリーは、インド社会にどのような影響をもたらしているのかを探りたい、そして、伝統的な慣習のあり方と、インドの女性が直面している問題の根本的解決を開示していきたいという理由から大学院に進学することを決めました。

5. おわりに

私にとってサービスラーニング科目とは、学んだことを人々や社会のために役立てることだけではありません。社会貢献を通して自分の考えや価値観が広がり、より良い社会を構成していくために自分が出来ることは何かを考えることが出来る場所です。

もし、桜美林大学に入学していなかったら、サービスラーニング科目を履修していなかったら、大学院に行くという選択肢はなかったと思います。また、国際問題に関心を持つこと、国際問題解決のために自分からアクションを起こしていきたいという気持ちもなかったと思います。なので、サービスラーニング科目が桜美林大学にあることにとっても感謝しています。桜美林大学を卒業しても、学び続けたいし、今度は、自分の事だけではなく、この学びを誰かのために役立てていきたいです。

優秀賞

公教育における外国につながる子どもの日本語学習支援

リベラルアーツ学群4年 小林 美香子

2020「専攻演習Ⅰ」「専攻演習Ⅱ」(日本語教育専攻/担当教員:川田麻記)

【履修したサービスラーニング科目】

「年少者日本語教育」

2021「卒業研究(日本語教育専攻/指導教員:川田麻記)

1. 外国につながる子どもとは

外国につながる子どもとは、両親またはそのどちらか一方が外国出身者である子どものことです。来日時期や日本語レベルなどは一人ひとり違い、中には学級の授業についていけない、取り残されてしまうなどの困難を抱え、孤独や苦痛を感じ、助けを求めている子どももいます。そのため、子どもたちに寄り添った日本語学習支援が必要とされています。

2. 神奈川県横浜市内の小学校の現状

私が支援を行った並木第一小学校が位置する神奈川県横浜市内の小学校の現状です。日本語指導が必要な児童生徒がいる学校数 746 校に対し、日本語教育のために配置された教員は 304 名、日本語教育が必要な児童生徒数 5149 名に対し、20.2%の児童生徒が無支援状態で学校生活を送っているという問題があります。さらに、日本語指導が必要な児童生徒に指導を行う場である国際教室の設置には、児童生徒5名以上で教員1名、児童生徒 20 名以上で教員2名という条件が設けられています。この現状によって、教員が児童生徒一人ひとりに寄り添える時間が十分に取れないという問題が発生しています。そこで、少しでも長く寄り添える時間がとれるよう、日本語学習支援を行いました。

3. 横浜市立並木第一小学校での日本語学習支援

小学校の支援の実践場所は横浜市立並木第一小学校で、科目は「専攻演習Ⅰ・Ⅱ」「年少者日本語教育」「卒業研究」です。支援内容は主に日本語基礎学習支援とデジタル教科書を使用した教科学習支援です。新型コロナウイルスの影響による一斉臨時休業・分散登校中は家庭学習支援を行いました。この支援では、外国人家庭が情報弱者になってしまわないよう、保護者への声掛けにも取り組みました。

対面支援では、国際教室への取り出し支援と学級での入り込み支援に取り組みました。オンライン支援と対面支援の両方に取り組んだことで、物理的な壁がなく、目と目を合わせてコミュニケーションをとる事や空間の共有ができることで、気持ちや言葉の伝わり方が大きく変わる事を実感しました。そして、子どもたちと向き合っていく中で、一人ひとりに寄り添い、個に合わせた支援の必要性を強く感じました。

4. 公立高校における外国につながる生徒の現状

高校における日本語指導が必要な外国につながる生徒数は 10 年間で 2.7 倍増加し、平成 30 年には 3,677 名となりました。そして、高校では特別の教育課程の編成による個別の日本語指導が導入されていないという、小学校・中学校とは異なる点があります。これによって、32.4%の生徒が日本語指導を受けられていない、9.6%もの生徒が中退しているという問題が発生しています。

5. 東京都の公立高校における入学選抜試験

東京都では高校入試特別措置と特別入学枠が導入されていますが、入国後在日期間3年以内という対象制限が設けられています。このような現状から、日本語指導や助けを求める声が多く存在しており、支援が必要だと考えました。

6. 東京都立町田高等学校定時制課程での日本語学習支援

高校の支援の実践場所は東京都立町田高等学校の定時制課程です。科目は「卒業研究」です。

活動初期は生徒一人の個人支援でしたが、中盤で生徒が一人加わり、対複数人の支援となりました。一人から複数人になり、仲間ができたことによって、個人支援の時よりも生徒の学習に対する姿勢や発話に積極性が見られるようになりました。

また、活動初期は「わかりません」「忘れました」などの返答が多くみられましたが、支援の回数を重ねるごとに、具体的な内容を含んだ返答が増えていきました。さらに、最初は緊張気味で硬くなっていた表情にも変化が見られるようになっていきました。これらは、間違えることへの怖さの減少や自己肯定感の向上、支援者と生徒間における信頼関係の構築によるものだと考えます。また、高校での支援は日本語教育経験者1名と学生で連携して行いました。これによって、新たな視点からのアドバイスや支援方法の提案を得ることができました。

7. 日本語学習支援サービスラーニングを通じて学んだこと

この日本語学習支援サービスラーニングを通じて私が学んだことは3つあります。

一つ目は、多くの外国につながる子どもたちが苦痛や困難を抱え、助けを求めていることです。一人ひとり表し方は異なりますが、子どもたちは社会に取り残されている苦痛や孤独感を抱え、助けを求めています。その想いに寄り添い、声をかけ続けること、それが日本語学習支援の意義だということを学びました。

二つ目はスキヤフオールディングの重要性です。何事もやってあげるのではなく、生徒ができることが最大限に発揮できるよう、支援者が足場架けをしてあげることが成長や変化につながることを実感しました。

三つ目は、日本語学習支援は学力向上だけが目的ではないことです。小学校の国際教室も高校の日本語学習支援も、その場と時間が子どもたちの居場所であり、アイデンティティや自己肯定感を形成する場であるべきだということを学びました。

8. 日本語学習支援サービスラーニングと「学而事人」

日本語学習支援サービスラーニングにおける学而事人とは、多様性を尊重する立場から「多文化共生社会の実現」という社会課題を解決に導くため、日本語教育メジャーとして学んできたからこそできること・やるべきことを探求・実践することだと考えます。日本語教育学を学び、得られた知識や経験・考えを活かし、社会課題の解決のために行動することが、学而事人の実現につながるからです。

9. 私にとってサービスラーニングとは

私にとってサービスラーニングとは、人が抱えている問題を自分事として捉える時間と責任だと考えます。この経験と学びから、将来は多文化共生社会の実現に携われる仕事がしたいという考えを持つようになり、卒業後は多文化共生を使命として掲げる公益財団法人団体に入職することを決めました。サービスラーニング活動を経て得られた学びと考えを活かし、社会と人々の役に立てるよう、一人の地球市民として行動していきたいです。

優秀賞

地球市民とサービスラーニング科目

GC 学群4年 茂田 聡美

【履修したサービスラーニング科目】

2020「インターンシップ(インド NGO)(J)」

1. はじめに

私は 2018 年、グローバル・コミュニケーション学群に入学し、その際、英語で世界中の人とコミュニケーションをとれるようになりたいという思いから、英語特別専修を主専攻として選択した。その後、留学にて様々な背景の人々に出会う中で、世界の現状や国際問題について学びたいという思いが芽生えた。そこで、帰国後の2年次秋からリベラルアーツ学群の国際関係専攻プログラムを副専攻として学び始め、様々な国際問題や人間の権利・保障などについて広く学びを進めた。

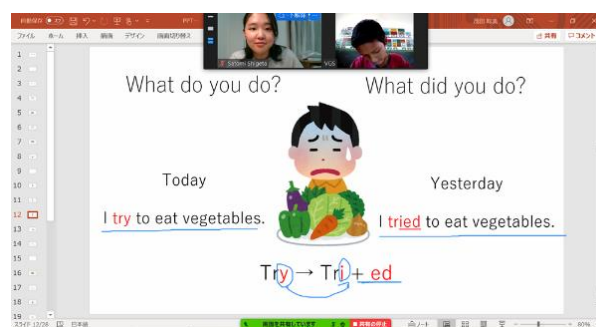
その学習の中で、私は“たとえ途上国や世界のどこかで起こっている問題だとしても、必ず先進国で暮らす私達にも関係がある”という点に衝撃を受け、自分自身が責任ある行動をしなければと考えるようになった。そして、国際問題に対し、学ぶ側から変化を起こす側として向き合うことができるのは、サービスラーニング科目ではないかと考え、2020 年度秋に「インターンシップ(インド NGO)」に参加することを決めた。

2. インドの社会現状と活動内容

インド国内では、宗教的なカースト制度が根強く残っており、多くの人々は生まれつき社会的機会や権利が制限されている。その中でも、特にカースト外に位置すると言われている“Dalit”という人々は、“不可触民”として社会的に多くの差別を受けている。今回は、そのような現状に置かれている Dalit の子どもたちに焦点を当て、平等で十分な教育の機会を届けることを目的とした活動を行った。

今回、私が参加した団体は、インドの国内 NGO である VEDIKE である。インド南部の農村に位置し、2010 年に様々な地域社会問題を解決することを目的に設立された政府公認の NGO だ。地域住民と“共に”活動し、問題解決に取り組んでいく活動方針を元に、地域や個人に向き合った草の根レベルの活動を多分野にわたって展開している。私はその NGO のメンバーと共に、3週間活動を行った。コロナウイルスの影響でオンラインでの実施とはなったが、期間中 VEDIKE Global School に通う小中学生に英語と算数を教えた。

この活動中、私には一つ意識していた点がある。それは“今ある形にとらわれない”ということだ。通常学校では用意された現地の教科書やプログラム等に沿った学習が行われている。しかし、私は「私だからこそ教えられることとは何か」という点を追求し、普段の授業とは異なる方法を実践した。一例として、写真にある“自作パワーポイントを使用した授業”が挙げられる。オンラインであるからこそ、担当する子どもたちの毎日の理解度に合わせた教材を自ら用意できるという点に注目し、期間中は毎日パワーポイント等で教材を作り、子どもたちに教えた。ただ、実際はこの日々の振り返りと教材作成が苦労した点の一つでもあり、地球市民として活動する上での苦労を身をもって学んだ。



3. 活動から見たこと

今回のこの活動を通し、私は学ぶ立場では見えてこなかった多くの発見を得た。そのうちの 하나가“社会・国際問題解決には“共分野”が重要であるという点だ。ここでいう“共分野”とは、特定の地域や社会課題について、そこに生きる人々と共に問題解決に取り組む NGO や地球市民の活動を指している。現在、国際問題解決に向け、国際機関や国家、企業など様々なアクターが世界中で活動している。しかし実際、遠い地で苦しむたった一人に対し、寄り添ってともに歩いて行けるのは、そこに向かい、行動できる人や団体である。彼らこそが“共分野”に含まれる NGO や私たち地球市民であり、活動を通して私はその重要性に気がついた。



また、2つ目に、“現場に飛び込む、その行動が何よりも重要であり、どんな人でも変化を起こすことができる”という点を学んだ。私は大学にて多くの国際問題や事例を学ぶ一方、ただの一学生である私に何が変えられるのだろうかと感じてしまうことが度々あった。しかし今回、私は自らが学んできた経験や方法を元に、学生の私でも子どもたちの学習環境に変化を与えることができた。この経験から、国際問題解決には教室で学ぶだけではなく、行動を起こすことこそが最も重要であり、その行動の先にこそ変化があるということ学んだ。

4. 学而事人とのつながり

これらの学びから、私はサービスラーニングは学而事人の思想と強く結びついた活動であると感じた。私は、学而事人とは“社会問題に対し、社会を作る一員として責任を持つ”こと、また“教室での学びを外へ持ち出し、問題に苦しむ人々と共に解決に向けて行動すること”であると考えている。今回の活動は教室で学んだ問題に対し、一地球市民として現地の人々と共に解決に向け活動するという経験であった。このことからサービスラーニングは学而事人の考えを反映した活動であり、行動から学びを深めていける場であると言えるだろう。

5. 私にとってのサービスラーニングとは

一つ目は、行動し、変化を起こす勇気と責任感を得た場所である。行動すること、変化を起こすことは時にリスクも生じる。実際、私自身、今回新しい指導法を持ち込むことにより、子どもたちの成長をかえって妨げてしまうのではと悩む場面もあった。しかし私は今回の活動を通し、自らが考え、変化させる力を持っていると気がつくことができ、挑戦することへの自信につながった。同時に、地球市民として学び続けていなくてはならないという責任感も強くなった。

そして二つ目に、サービスラーニングは複数の立場から“共に”解決することの重要性を学んだ場所でもある。活動当初、私は自身を子どもたちに教える立場であり続けなくてはと考えていた。しかし、活動を通し、現地のスタッフや子どもたちから、私が学ぶことも多くあった。このことから、行動した先では、引っ張っていく立場にいただけではなく、学ぶ立場でもあり、共に問題解決のために行動することが何よりも重要であると気がついた。

6. おわりに

今回の学びは、決してここで終わりではなく、これからも自らの行動に活かしていくことで意味をなす。今後はこの得た力や考えを一地球市民として社会に還元し、変化を起こせる人として学び続けていきたい。

優秀賞

社会の裏で苦しんでいる人達と出会う

リベラルアーツ学群4年 嶋野 鈴

2020 「専攻演習 I」(国際協力専攻/担当教員:牧田東一)

【履修したサービスラーニング科目】

2021 「国際協力フィールドワーク(フィリピン)」「地域社会参加(わたしたちに身近な貧困)」「地域社会参加(地球にやさしい食と農)」

1. はじめに

私は4年生の前期に「地域社会参加(わたしたちに身近な貧困)」と「国際協力フィールドワーク(フィリピン)」を履修しました。現在は「地域社会参加(地球にやさしい食と農)」を履修中です。なぜ私がサービスラーニング(以下、SL)を4年生で履修したかという、4年生になり単位に余裕が出てきたという理由もあります。ですので、前から気になっていた SL 科目を履修することにしました。もう一つの理由は、SL は学外での活動があるので今まで学んできたことを生かすために、大学の学びの集大成にぴったりだと思ったからです。数ある SL の中からなぜこの授業を選んだかと言うと、日本国内の問題に目を向ける機会が少なかったからです。私のメジャーである国際協力と国際関係では海外の発展途上国について主に学んできました。しかし、先進国であるはずの日本も様々な問題を抱えていることを知り、もっと深く学びたいと思いこの授業を履修しました。

2. 活動について

「地域社会参加(私たちに身近な貧困)」の活動先は5箇所ありました。相模大野駅周辺で野宿者の方を対象とした夜回り、子ども食堂ちゃお! ではコロナウイルスの影響で食堂が開かれていなかったため、お弁当作り、つばめ塾では中学生に数学を教えました。子どもセンターただ ON では、クラスメイトと遊びを企画して子供達と遊びました。中国人の留学生がいたので、中国語を使った遊びを企画したのが印象に残っています。寿町では炊き出しのお手伝いをしました。私がこれらの活動をするにあたって気をつけたことは、まずコミュニケーションを取ることです。支援対象者はもちろん、クラスメイトや団体の方々ともコミュニケーションを取るようにしていました。お互いのことを少しでも知って打ち解けていた方が、お互いに活動しやすいと考えたからです。クラスメイトとはせっかくなので一緒に楽しく活動ができればいいなと思っていました。他には、同じ目線に立つことということです。例えば、子どもと一緒に遊んでいる時は一緒に全力で遊ぶ、一緒に喜ぶ、一緒に悲しむなど、何事も一緒に感情を共有することで同じ目線に立てるように心がけました。



町田市子どもセンターただ ON での活動
「地域社会参加(わたしたちに身近な貧困)」

活動を通して学んだことは、見返りを求めないということです。ボランティアをする側として当たり前のことかもしれませんが、現場に出て体験することができました。また、団体の活動はたくさんの小さな協力があって成り立っていることを目の当たりにしました。子ども食堂では「少しだけ」と言いながら野菜を持って来る農家さんが沢山いました。つばめ塾では近所の方が文房具や日用品やお菓子を寄付してくださ

いました。そんな小さな優しさが積み重なって活動ができていることを知りました。今履修している「地球にやさしい食と農」ではそんな農家さん側を体験することができました。この授業では、淵野辺ふれあい農園で畑の管理をしています。ここで収穫された人参と白菜を先程の子ども食堂ちゃお！へ提供しました。団体の活動を支える側も体験することになりとても不思議な感覚でした。作業は手作業で大変ですが、あの時話した子ども達が食べてくれると考えると、とても嬉しい気持ちでいっぱいになりました。



収穫した野菜

「国際協力フィールドワーク(フィリピン)」は、今まで学んできたことを実際に自分の目で見てみたかったので参加しました。途上国は、ペルーに1ヶ月半旅行で滞在したことがありますが、児童労働、衛生面、インフラ設備、治安など沢山目につくものがありました。ですので、旅行でなく勉強として発展途上国を見たいと思いました。ここでは、彼らと問題意識が全く違うことを感じました。例えば LGBTQ についてフィリピンの方と話すと、私達とは全く違う考え方を持っていました。そのため、支援する立場である時は、その国や地域、人にあった支援をすることの大切さを考えさせられました。もう一つは、自分が知らぬ間に先入観を持っていたことです。ゴミ山で働くのは可哀想、お給料が少ない仕事という先入観があることを現地の方と話していて気付かされました。この先入観がなければ、もっと違う視点から話を聞けたり質問ができたのではないかと考えました。

「地域社会参加(地球にやさしい食と農)」

3. 活動を通して変わったこと

私は SL 活動を通して、誰かの助けになる仕事を目指すことを決意しました。そして、今年の JICA 青年海外協力隊に応募しました。結果は残念ながら落ちてしまいましたが、また挑戦しようと考えています。自分自身が変わったと思う所は行動に移すようになった所です。私のアパートには、いつもランドセルを持ったまま家に入らず外で1人で遊んでいる女の子がいます。前までは、気になりつつも話しかけることはありませんでした。しかし、活動後は暑い日に外で本を読んでいる時は飲み物を渡したり、挨拶のついでに一言話したりするようになりました。こんな小さなことであっても行動に移せた自分の変化は大きいと感じています。

4. おわりに

私にとって SL とは、現場に行くきっかけであると考えています。ボランティアに参加してみようと思っても、なかなか勇気が出なかつたりついつい後回しにしてしまいがちですが、SL は行動するきっかけを与えてくれるのだと思います。そして、参加することによって自分の世界が広がり自分自身をもっと理解することができます。活動先はすぐ近所であっても、沢山の様々な出会いがあります。そして、当たり前ですが、全員にそれぞれの人生があります。そんな話を聞いたり、一緒に考えたり悩んだりして自分の世界が広がります。この様な体験を重ねていくうちに、自分自身はどういう人間であるのかをもっと深く理解できると考えています。

優秀賞

「学校」という存在

リベラルアーツ学群4年 松本 萌可

【履修したサービスラーニング科目】

2020「地域社会参加(子どもと教育)」

1. はじめに

私は、3年生の秋学期に「地域社会参加(子どもと教育)」の授業を履修しました。今回は、この授業での学びを「『学校』という存在」というテーマで述べていきます。

私は、英語の教職課程を履修しています。そのため、4年生の春学期には教育実習があり、その前に様々な子どもたちと関わる機会、教育について考える機会が欲しいと考えこの授業を履修しました。

2. 活動

「皆さんはどうして学校に行かなくてはいけないのか」という疑問を持ったことがありますか。私は、今まで学校に行くことが当たり前すぎてこの疑問を持ったことがありませんでした。学校は、必ず行かなくてはいけないもの、どんなことよりも学校が最上位に来るものだと考えていたのだと思います。しかし、この授業のディスカッションで「学校よりも地域の人との関わりで自分は成長できた。」「習い事での出来事が自分を大きく変えてくれた。」という意見を聞き、みんなが当たり前のように通う「学校」という存在とはいったいどうあるべきなのだろうという疑問を持つようになりました。

この授業を通して私は、学校も子どもたちの経験のうちの一つであるという結論を導きました。この結論のきっかけのひとつに BASE01での活動があります。

〈BASE01とは〉

BASE01は淵野辺駅から桜美林大学の反対方向、徒歩5分くらいのところにあります。ここでは、小学生や中学生を対象に、児童発達支援や放課後等デイサービスを行っています。障害を持った子どもたち、不登校になってしまった子どもたちだけでなく、その家族を含めた居場所の提供を目的に活動しています。私はこの BASE01で個別養育に参加し、またクリスマス会の企画・実施を行いました。

① 個別養育

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
①男の子 (2年) (4年)	😊	★				★
②男の子 (4年)	★		★	★	😊	
③女の子 (2年)				★	★	😊
④男の子 (4年)			★	★	😊	

★ →関わった日 😊 →印象に残った日

左の表を見てください。私がボランティアとして個別養育に参加した回数とその時にかかわった子どもを示しています。星マークがついている日が左側に書かれている子どもと関わった日です。にこちゃんマークはその子と関わった中でも特に印象に残った日です。

特に私は、表で示すと④の4年生の男の子との5回目の養育が非常に印象に残っています。その子は、何をするにも「いやだ」という言葉を発していました。ボールで遊ぼうといっても、勉強しようかと言っても全部「いやだ」という風に言っていました。しかし、「いやだ」という割にはボールをもってきてくれたり、椅子に座って塗り絵をしようとしていたりしていました。私たちにとっては「い

やだ」という言葉は、「やりたくない」「関わらないで」という意味の言葉かもしれません。一方でその子にとって「いやだ」という言葉は「一緒に遊びたい」という意味の「いやだ」だったということにBASEの先生の助言もあり気づくことができました。私の当たり前は相手にとっての当たり前ではない。言葉だけのコミュニケーションではなく、その子の行動に注目してあげることの大切さを実感しました。

② クリスマス会

私を含め履修者5人でクリスマス会を企画し、約10人の小学生が参加してくれました。私はリーダーとして、子どもたちが楽しかったといってもらえるように仲間たちと一緒に準備に励みました。クリスマス会では、検討した結果工作づくりに決定しました。

苦労したこともたくさんありましたが、その中でも企画のレベル設定が非常に難しかったです。それぞれの子どもたちが苦手なことや得意なことが違うので、どのような工作にするか決定するのに苦労しました。そこで、私たちは、工作の種類を一種類に限定せずに、三種類の工作を用意することにしました。好きな絵を描く、色を染める、好きな飾りを選ぶ、と自己表現の仕方が一通りにならないように意識しました。そうすることで、子どもたちに、好きなアクティビティーを選んでもらうことができたのではないかと思います。

3. 学びを通して

このようにボランティア活動、また授業の講義を通して、私は「学校」だから特別、一番というわけではないということを改めて感じました。なかなか学校に馴染むことができない子どもたち、学校に行けなくなってしまった子どもたちがBASE01でのびのびと成長する姿を見て、「心を許せる場」が子どもたちの経験の中には必要であるということを感じました。ここから、「学校」も同様に子どもたちの経験のうちの一つであるべきだという考え方ができるようになりました。「学校」という場の存在意義がただ単に勉強する場、必ず通わなければならない場、ではなく「学校」というすべての子どもたちが通う場が、一人一人心を許せる場であることが求められるのではないかと考えさせられました。

実際にサービスラーニングの授業を履修してサービスラーニングの授業の目的は、講義とボランティア活動を通して新しい価値観を自分の中に取り入れ、自分の考えを深めることにあるのではないかと自分なりに考えました。子どもや学校現場だけではなく、普段人と関わる中で、「どうしたら相手とコミュニケーションが上手くとれるか、関わっていけるのか」という手段を常にみつけようとし続けることの大切さを感じました。

5. 最後に

私にとっての学而事人とは、自分の価値観を他者と分かち合いどうやって共に生きていくべきなのか、常に試行錯誤を繰り返して、社会に貢献しようとしていくことだと考えています。

子どもたちの前に立つ、教師としての学而事人とは、「学校が居心地の良い空間」であると子どもたちに実感してもらえるような居場所づくりから始まると考えました。目の前にいる生徒一人一人の困り感や、価値観を理解し、自分自身の経験を踏まえながら生徒たちの話に耳を傾け寄り添えるような教師になることを心がけることが大切であると考えます。実際四月からは、すぐに教師になることが決定しているわけではありませんが、2・3年後には学校の教師になり、子どもたちが笑顔で、のびのびと成長できるような学校教育に携わりたいと考えています。

優秀賞

学びのはじまり

リベラルアーツ学群4年 武藤 磨美

【履修したサービスラーニング科目】	2018 「地域社会参加(子どもと教育)」
	2020 「地域社会参加(沖縄学入門)」

1. はじめに

私は高校生の頃、こどもの貧困のニュースを見て「かわいそう」と思っていました。しかし後に、勝手に「かわいそう」と決めつけているのは自分ではないかということに気づき、本当にかわいそうなのか考えなければいけないと思いました。そして、社会問題について広い視点で学びたいと思い桜美林大学に入学し、実践的に学べるサービスラーニング科目を履修しました。

2. 活動の中で意識したこと

サービスラーニング科目の「地域社会参加(子どもと教育)」を履修し、町田市内にある児童養護施設で生活をしている中学 1 年生への学習支援を行いました。この児童養護施設は、小規模施設として運営されていました。学習支援を行う中で「同じ時間の同じ曜日に毎週行くこと」「彼女の好きを伸ばし、たくさん褒める」ことを意識しました。

これらを意識した背景には3つの出来事がありました。1つは児童養護施設施設ならではの悩みを抱えている彼女の言動がありました。現在、児童養護施設では、一般家庭に近い生活体験や個別化を実施し、これまでの社会的養護の課題を克服するため施設の小規模化が行われています。私が支援を行った彼女も小さい頃は大規模施設で生活をしていましたが、小規模施設に移ったそうです。「前までは仲良い子とだけと仲良くしてればよかったけど、今は合わないと思う子どもと一緒に生活しなければいけない」という彼女の発言から、彼女のコミュニティの外にいる私だからこそ話せる話があると考えました。

次に施設の方に「施設では大人の数より子どもの数の方が多く、一人ひとりに十分に目を向けてあげられないから助かっている」と言っていたとき、普段あまり取れない1:1の大人との時間を大切にしようと考えました。

3つ目に、授業で視聴したある児童養護施設での映像の中で、親の都合で子どもとの面会が延期になる場面がありました。大人への信頼がしづらい環境にいる彼女、だからこそ信頼関係を築くことを大切にしました。

3. 児童養護施設と家庭の違い

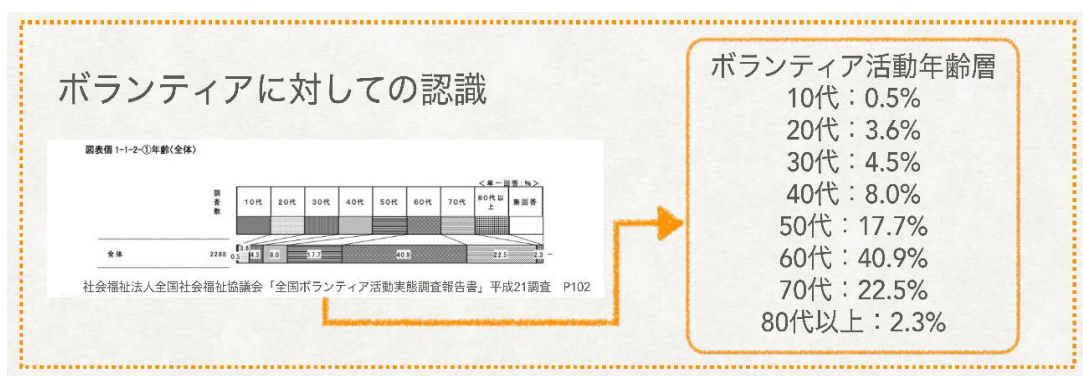
彼女は会話の中で「将来お金を貯めて母親と暮らしたい」と言っていた一方で、彼女は母親からの身体的虐待によって施設に入った様子でした。小さい頃、母親から虐待を受けていたけど、将来、母親と一緒に暮らしたいと言っている彼女の気持ちが私には理解することができませんでした。

しかし、活動を続ける中で「家庭」と「施設」は違うことに気づきました。施設は自立するための場所であることや、「職員」はそれ以上でもそれ以下でもなく、「頼る」という一方的な関係です。ですが、家庭は目的をもたなく、期間も決まっていない、「頼る」「頼られる」相互的な関係にあります。つまり、彼女は「家庭」という場所を求めていることに気づきました。

4. ボランティア

私が関わった児童養護施設では多くのボランティアを受け入れていました。調べてみると他の児童養護施設でも多くのボランティアを受け入れています。児童養護施設は、実はこのように社会に開かれた存在であるのですが、児童養護施設でボランティアを受け入れていることはあまり知られていない事実だと感じました。

その原因の一つに若者のボランティアの参加率の低さがあると考えました。平成21年の社会福祉法人全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」のボランティアの活動年齢層のグラフをみると、10代、20代の参加率が最も低いことがわかりました。このことから、私はもっと若い人がボランティアに参加し、身近ではない問題に触れ、社会問題について考えるべきだと感じました。



4. まとめ

私にとってのサービスラーニング科目とは知的好奇心を常に刺激する時間でした。サービスラーニング科目で学んだこと、一緒に学んだ人、活動で関わった子どもや施設の方、全てこれまで学校では学ぶことができなかった「リアル」を学ぶことができました。

今思い返してみると、私にはやはり最初は「児童養護施設の子」に対してかわいそうと思っていた部分がありました。しかし、活動の中で、彼女たちへの「かわいそう」という感情は余計なお世話だと気づきました。彼女たちの中にある悲しい出来事、楽しい出来事、全て彼女たち自身がどう受け取り、どう受け入れるのが大事だと考えます。

一方で、「かわいそうだから」という思いからもらえるサポートもあると思いますが、このような支援に見られる「かわいそう」という感情は、本人の意思とは関係なしに社会といった別のところから刷り込まれているものだと気づきました。

このサービスラーニングの授業の後は、海外支援や放課後デイサービス、フリースクール、保育園などでボランティア活動を行いました。卒業後はこれらの経験を活かし、どのような子どもでも楽しく学べる教材をつくりたいと考えています。

どこか遠い話だと思っていた出来事が、実際に私が今生きている社会の出来事であることを知り、私に出来ることを考え行動する機会を与えてくださり感謝しています。